八雲雅藻

全

ル 4
4926

八雲雅藻

目録

東奥紀行 寶永元年五月注記

東奥勝遊記 同年七月

故人懐旧記 同年八月

遊松浦嶌記 同年九月

武野府紀行 同二年三月

早稲田大學圖書

門 ル4
號 4926
巻

東国道記

今年寶永五のとし初の卯月のころ帰国乃暇申し
けれハ旅のよそほひして同五月十日あまり武蔵野を
立出て過し方の陸奥へおもむきぬ此年月を
経て帰る路なれハ嬉しさかきりなく父母を初め親しき
てえたりしある人々もまちわひ侍らんとおもひ
知かくぬるもあまりなれハ二日三日ハ五月雨打続き降
侍るまゝにとゝまり日数経けれとも晴まもなく侍りき
五月雨ハ実に晴て旅衣打袖をしほる人の朝の出立
涼しからし日数を重ね旅店を出る今日此の宿のはずれ
なる辺を見渡せハ千住の宿を過る春の名残の
千寿の宿にてあるを見れハ田子のたち居て早苗
とる女を見て

松倉藏書印

38- 7247

時雨しや山田のさなへおち葉をとるまゝも秋のいろ雨ふりける
ちかつくらしてに鴫の声を聞て傍も興ありて
千世も行つゝ行かへるとや道のゑ大田鶴まて
物語は飛りつろ津きて夢のおもき常は枝よりり
飛けまし孫も中れきて
身には又なりまとめ語は常枝いそぬつよ女めあるもみん
夜明ぬれはむさし一夜かへる物にて津を行つゝ生ぬるふは
夜もくなるかちりて民は女なれる朝けの煙あ津
もうさいし
行き民は女なれ志つまて山本に一村ありて家津け帰つ寺
松戸は諸々に姓行きて稲あつまりちて在々なる
人とかくもよう志つきて
志津けりなかりのいうもと物語つて来まえ行る奥のまるは

道のかたハしてはうやうやう志けりてあらのかをなかに
刈人もなきぬき月は浪にあるあしたは何となかれん
雨ありけるまゝ人をあまねくしに雲右も見るを能世さけ
しきるつし
今日はあまり雨のふる志ある春し昨日は神も川あへぬきま
ぬるに雨まやくしとるくるるや行まぬまとき諸のくさ
ぬまりけて古行の浪り毎そ浪りちくらり中田は宿とかやま
志をしくえりて雨のてれなくあつまおもれなあり多れを
又え生ぬかるつて水山のとまりつまい交は雨ゆとうち
あ伊しても女なるちらし浪なる宿のあまりて交く古村は
まのきらしかりもやあんとえ父細村朝ちのえとりく安
ものかりんしかくる日もやふしきなるに雨は中をもつ物
なしぬまてあまと旅道さくいいうとまてちらして

けふ程まよりはるかにはよしきの雨の気色はいとゝあやうさも
吉田し紬あまりあまりかゝりし乃称してや雨はさ所人
りしれて簡ありける野の条あたに成りぬかたゝ
十二日今日も宇都宮にとゝまりて雨ふりしかは
き道あらし様は云出ぬ志あゝまる程と志あしに晴色
かれ様あへ又まとれたる程葉にてや雨のの引構
あなるかなしとて
雨は少晴て後もまたかゝるかゝるの程
又日光なる方にあたりてあまた筑波山見へありて雨程
あまりて雲にしほにあらさるへき
さらなかに見えしもみてゝ筑波山の山かのかゝる雪
ち月の半のまゝ山もさまれにてゝ青葉に
の山かの山の路る人にて又葉山やけ筑波の道にて

金井といふ所あるに足利の名の残といふある処
ゆへありけるにや雨もふりしかはれて日照りのけ
しきも知らし
晴るよりかさなる雲もなく見へて昨日までの五月雨の名
雨もよに雲のたち見へて日光もあり中にはる中道
かくてける大井中に伊勢の宮もありてゝは四五人
道のかたはらにあまたへるけるにかまりきえ
園乃けむりもゝさゝやし家園の物やるんと南
稀なるへき舘の名と今やしなかのきもゝ家園よりと
きけは宇都宮のしく知る見て
名のみ志てぬ脇の人まて又は其の人々まけは南津
南の方より宇都宮は日光の世家は其の日光
山へまかる津無きとるもれ候りぬ上侍従宗朝

臣かけ侍しもかしこき世宮居のゆかりとてたのもし
より世々の後文綱村の臣として世々にいふなりて初て大国
の津のなてまて世に居しろへきくはる年をなれ里に夜ぬ
うて名里をさきよりに両ぬりそこ道の程とも多ふらくさ
に御る侍らりすさしして日の光もさやかなりける
名まは日光山とも見て

今日はまや宮まうでして日の光はま猶文神の恵と添る
世所名なる所といふ里なるに左右に山をなし只和枝志
けりなる処あるをさきの方に大津の路にせや立まして
年始剣手に社まいりて之出をいけに路のかなうて社まいり
人をともと成尾権現なりといふ行先日光山もちなと
云処あり、ともくりぬ宮に宮津くりせりも此名なり
なやしく只いふも多津禄としは一許なりといふなときて
宮にはあまたの替(?)へる津なる音にきくは此石も同し成尾の神
未此剣手に鉢石の名なりとて名の旅を名しみとて名
をいしなへりまき名日あるけれともかの縁にありとて知
りあるらし先さし又に山菅の橋なりもなりて

世を是にても安あらは渡しにかの縁の長き橋にかけし鶴
藤をも渡りて二三十町斗頭上へいありてみるに杉桧生茂く
千尋の本末をなしつへあるなかに於姉のある庵室なり其よ
かなうるに岩あるみなりてすさまじき関係の彼様けし
きもよの津禄なりしまでにすさんふ含満の関とる名津くもで
うふ岩かかもまんの林の宮まうてに於なるの世の華方
なくも岩をてきらあろ不動の像路に向ひてまかのひら
物すきにきるといふもんかなる

岩かほに云すかなの文字なしと梵字のけてに世とまるらん

是よりまたくだりに安楽寺へ通ぬ道は所々のきさき五丈斗
行んといへる石作り石は上より下まりひとつらもあらる
る所是を人生石とも仏とすずしきしやすくしてさかし
き道をとふして拝むまにしあるも一宇の唐作りの宮は稲
生て仕しまくは石は坂七八十間もおりて山上より権現
あり宮津る旦袖をしゆりの宮師の作りむんやといふは
ゐは作りとめ作りけるものかめてもはりぬ所はあ方
は高さ二十丈斗は蹴あり是本の名と口くるらむ系そ
いふなれ
此辰る山風吹つゝ蹴てものを待ひく帝北涼しさ
菩婦のくさ新玉の志けるものへ旦宮里より志けらはる蹴る
くへあれや宮よりは志ける木の宮りうきまそ蹴のふ系
嶽かゝ唐宮かまた文志くる所にる蹴滔

また二ヶ所は弥陀仏の宮あり仏像は津の造りなりしぞる像とふ
又かめきりしまニ一宇は寺もかしけりをかけ宮あり是は豊
とおして拝石は講堂は御ゐ猫泉条行くも稲荷内
守正は来りて世山の奉りよそたに昆より寛とま
作りは唐は仮名とふかしとして若きてる中本かまて以
下陽ら十四間ありるるともし弥陀車前を行ふあり
下宮又とたぬ時かしたもやかりはけれは観音堂の坊まゐ
ふ又て志くくやすろふ刈る世事の日まさ下のまる見
るまは所寺涼しく宮つてむそのふは標鈴の岸星臺
の宮へ往くのあし山上あり岩日に宮をも志のく
らんともある本も志けり吹なる巌は精まり津
ろふ朝日のかけいふもそら所は世山は常に雲さかり如く
旧影乃ら日なるまにふる所より少しまだ白い人まりあるとそ

なけしきなくの前

雪ふりて晴ぬる空は出羽の名のかけあふくもえぬ日の影
残して御神前へ参りてきらし清らにしてむねと意を
失て御尋ねありし黒髪山まうかく見えつ二王門
をすぎて行くかしこに名ありて石の台ありて井ある東に
三ツ鳥居御祓所陽明門の右に鐘銅のつりたる
あり是なむ元和の始めし薩摩宰相家久公の
高祖父宰相政宗公の寄納ありし由を本地堂あり
左右にきんでんろうかく金にして緑のいらかとみえ
あり又朝鮮国よりあげまつる華鐘あり李恒の銘
あり又やうやく宝二ととせ東照権現三十三回忌
に藤原為京師長黄金へとをあして造らせらるゝあり
さいとききのはみちりもはれしとみへのぞむ玉の稿

あさやかくてあけの高麗村ささの新殿ところを四方をま
はせし駿山宮もかくまかりやと物さけ見るものいと結ふる
しくさきのみけまさるこさく蓑ある照御前に侍る
御のみて

行さかしきろけき道のおもはれもてなさむ袴のちりとひかる
内陣本殿の右柱七ッ様くるゝのあり大和のいみかぬ唐
あとはくしてはるゝなる彫物あることくはけてはいし
あでんも言の葉にあるなましらかん大樂院生念に世宮
御修理おあり綱村殺長朝きらけるつきらりにて
御其所ありあかあり生見より大猷院殿の御廟に
まいる御のてて三佛堂并ニ輪橋右大将輪胡人世山に
燈油料とて寄附しけれ時一宇の堂をたてられ御寄
見たくりて御堂へ参り奈良に舘在院なる

より是より直に山道をのぼり瀧尾へゆくに麓に清
き霊水ありて神供にも用ひ侍る一流ありといふと
きゝて
わきかへる御神水は世のちりもあらはてんやとこそ流れは
流れに添ひて岩くみけもしくは山岩水山とて夏も水雪
きくまであらんとおもへ
いかはかり年ふる年ありけむ林あるはらんとのの山の岩移す
瀧尾に詣きて
守りは法ちりの念する者世にもしくは名も二つる瀧尾の神
瀧はあなりに乃後に見えたり三本松本宮なと旭つなと
知るも見侍りて年の刻る所は猿のやとりに物めつらか
して物ありくるに道の後なりけれはさそに暮れ
暮れるも来れはたとらし猿なと日ふらして道のかへるさ

此は刻もなりに新宮に詣ぬ十五日なれは宮にも
よりはみな書津のましてとこの日なけて後出まて
下ける道は中そめる古文なくてとまりに宿まりぬ
夜なくるなりは旅なれなは常なくてもおもふ月のかけ
もかあるかなりて
ちくまでもやとりとなまて夜中の月常の枕はあまれぬやと
涼しさは秋のこゑも常枕にあけやすきよの月
今日は二河法宮へもまゐるとおもふに朝のかな風ひやか
になりて身の老みけれは
今日まゐる宮所よふよきに秋も袖の朝風
なきに野の原となる所に上道書浅の御宮まゐりて
猶かなしうて又舞原為家の身まゐる人なきその荒野は
出ろ世をもかくみなしもおなかりにけるを荒野のなかりよ

ぬけ出つまて下野と陸奥のさかひにいたりぬこゝハ境
の明神とて社ふたつ並ひたてり下野の方なるやしろハ
玉津島なり御祈して
ことはりなき世のなかめくて語りけるや神のあはれみけん
白河の関にかゝりにけるに
音にて今はなる跡には白河の関とはいへとも関守もなし
かの能因法師秋風そふくと白河はときこえしけん人の歌を封
ふくみて
其後ハすきこしかたの秋風いとかなしくもふくる音かは川の実
あはひハ世路ともくれぬる日も暮なはてけれは名にあふ
処ハあらんもわかすして暮まし文者ともあつめて題
をさくりて歌よみ侍る是かれ筆あたへたるも十津
十七夜の月くまなく雨晴て出てやまさりけれは四方を

こゝを過るも知らて来つるかなたをゆきつゝ古河といふ処
に鏡の明神社あり宮より二里ほとあるて
かしこに又人も知す文しけ井山北に来しよの鏡みるも
郡山の館趾をとくて出るとて
其もとそはむかし出る館の持ハいかなる名にか有らん
二三町行て天正年に高祖父と伊達政宗と蘆名義廣
との戦場なり窪田にハ之る細川清水河岸
にある祖父を志のひて出のかれに討死せし伊東
肥前重信の塚なり
身も来て仕へし道の跡をも宮に御座せる後のあさき
音にきくあさか山ハあかなくて志はしやすらふ所に山の井
乃る処の昔みちのくしともなるみちと御ありて心あさくハ
けれともさらにてるとなりて先に五百川といふ所に宿

乃抄見えて
いくはくかいひつたへて須賀も千世のためしは名にはのこれん
二本松の城下なるそ平兼盛の黒塚も在りといひしあ
あたち原も此あたりにや在しときけとも見えすなと
尋ぬさらしき道の野山を辿るに日数ゆかしに供
の小者の皆ともにまくなりけれは
ゆるまゝの道すから見し花は野山のくさも行まゝに
福島の城あり出て米沢への道あり宿とらむとて
りまれの此山はゆくゝ見渡すらん石本今に
在といふとそきゝて
あはれなる旅立て今の世に在しきことの思ひの
飯坂にてぬれはむかしの者とも出あひていつれも
ゆかしき昔のことにあはれきかはしあかしも見て

時の足見て志ける者あまの原にても古国の月見て通る
道ゆきかゝりける事ありてこれその山見へあり十と也其日を
待れは人にはけしくれて出たり
年月を経て来し身は志まらの山きへ来る古への道
志まらの山きわめての月日も老しく御来しけるは
白石城に入ぬれは片倉小十郎明けて初てもおひけれは甚る
きたりけるかゝるを太閤殿の御兄日向れは
けれは名をあげて岩沼の
出てたちかく来ける宮城のゆかしき
ともかくして古内重興といふものゝ家に一日の日は
帰城の日なれはそのゆかしむ夜に名
とり川のかりそめ
ありゆきより秋あれはなれて名取川東へは埋木の

寳永乙酉暮秋　羽林少将藤原朝臣吉村

右中院亜相通躬卿加判

通茂公子 右大臣従一位 元文四年十一月三日薨 年七十二

削

塩竈松島記

塩竈大明神ハ当国に鎮守として往古より宮城
郡に跡をたれましますに先世の社に大樹まして仰くへき
て保国の後とおもしていましてたえす今もぬるまてなり
ときからぬことさへかなすへきなん毎月十日よりはこよひかの神乃
日なりけるに十五日にもむしろを侍る夜なりて城を出ぬ
明かなりく空にうちくもりて雨もや降りきぬへきを
おもふに道の言葉におほつかなきことの余りとおもひけり
見ゆるかたには浜のをちかたにをかしくあるさまと人々の
いふときゝて
塩津くれの影帽かゝるいとなみして乙ちけれは知に蜂の如き
市川村といふ在家のうしろに津かの石碑ありかの前
右大将頼朝卿のかふとはくしてよりとめたまへるとおもひし

出しまいて
いにしへの世まで書あつめて、かの人さの跡をもまたへだてぬは、いかなるいはひ
うき浪のよするにかぎりなくて
浦の人に指さしをしへられて、沖の島に老たる千とせの松は、なかなか
野田の玉川の跡とおぼしくて、法蓮寺の跡は
あるは文応将軍家より引わたし神前におきたりしを
まうけし社造営のこと、はしらをかけつらね、いかに後鳥羽
ありしか奉幣ありて後、太刀一振、また神馬をたて
まつりて文年にもよみおきし歌ともかきあつめたる
とて
あまたけても色なる文字の、そのまゝに[illegible]の外にあらはれたる
何かあまりて[illegible]伝へるにも、いとゞ[illegible]
海りて神かけし何かあの玉のさかしあらんとする

時は心もなかりけり、中々には何か付はことなるもなべてまかり
ほとけおはしますや、と思ひなしてたちまちあひがたく
ものやすらふ空のけしきもうらうらと暖今にもよりくる
又も舟もより出して松島へおもむく浪の上もいと静
に詣て所々に雑の島々を見るに
まつ舟の浪はひとつに出てあらはれ、いろいろの浦も見えて
私ともの十二三帆をあげてはしるもおもしろし、浦々
島しける都島の[illegible]藤原尚[illegible]は雄島か
まことはいさゝかのほとりて、けさしも松島へわたりて
迎の舟に任して宮中にまかりて又興ありて
何もかくしてひとつの末に松島のうちをめぐり月の寿
よふ海人やからかへりてはまた海上は舟の
内りてのこしは物の数にもあらずとよむ、見仏上人昔

六歌部の法衣師の知られける経か崎も見しにかまち
ありうたひなりは五大堂のあらはに雄嶋の右には
雄島見へ千鳥夕日ほうつ津るけしき画にかくともおよひ
かたし
名におふ千かうつ津しもこそも浪の上すみ夕日にうかふ沖の島
くれかかる雲の色もあさやかにゆかしかりけるあくのあし
津くるかといふ先の庭のこなて
名のみ来し浪路はるかにて磯山のさとまとまのかる入あひの声
夜ふかくなるままにあまのおもひぬ浜にあそひてあないつくつるゝ
ましきは小雨ましりの浦風に浪も立つゝ月のかけの
とひるこゝろはいかにもなまめきてしはさしいかなるも
舟よせ迎へ見えしとて舟にゆらしすゝろにほとに
名にしあふんやいつくにかかれ歌にも海の月を

遊ひをしてあり
雲をはれて風もすこしある浦浪にしろとまる月のこゝち
あかしとて明ぬるも見の名残をしく見るまにとまる浪の月かけ
いとけなる雄嶋の宮やあまのすむ藤なかの月のかけはまつる
雨風やこゝろやすからて舟に乗て出ぬ経ヶ崎をめ
くるすはたかの磯のあまにあはぬしかやくけふりかなて
浮ぬることを見て
よるもなれにあかぬこゝろの浦伝ひ身のうきをまきる
おもはすもあつる経島舟出のしくらうこへのくまとる
ことくなき胡くも出ぬるにこその奥にしくる浦々は
かへつていなかよりたとふ
浦々のいとあかすまてあくるも浪のまくまていろかうつ
浪の世になるもおもてきてはるいよのまさるかなるまてかなし
　京の人の経を
　やつれかゝ
　うつなくん

こゝもあさまに舟よせたれとひくしかなれは舟ならめあく
ちり舟ちらして旅魚になかうまうり流るゝおりふし雲そ
富山家にて志けりける松枝のしほより見渡す海上
に千鳥ともなひて沖ちかく舟も精にかよふさまなとあや
しかるをかれは浦けてなかくても右流刻けれ
とも舟に乗るへきしかつも見とまことをみさらむと
出て岸にたゝみ文ちらし舟にのりて沖なる
舟より浦をぬすらしめかゝりの風になきせ泊
りけれは舟の行もなくなりて暮ぬるに斗
松嶋といふところに更りて雨の跡あやしみなくて
枝の枕を尋ねてきけむ泊なれはかならすよかるら
くるかりとてしかも神のまに
夜もすから浦風あらくしみちもなく泊にふねちかく宿の和歌たゝ

日いつるかたにちかくなりぬ今は曽祖父忠宗
朝臣の見出るなる瑞巌寺にまうて焼香なとし
侍り擬大山のふもとにて天にゝにて麟徳寺へまかりて
なきのあと出して物語に付る也是よりの雄
島にいかう見佛上人の住しといふ所にて日なり
ぬれはいかにせんとまかりて元の庵よりて保福寺へ
又もしらし人へしかけ行るかと海のかなたにそ沈
まるよりにまかりてけさよりも立そる哉よりて晴
侍りしかは宿のかくもてなさるよりも見えしおかりて
嶋の名の松ゝしきをもよ家も又こゝら十人秋の浦か月
見もなかりしもなめるかな侍れはよそにかゝりぬ

右一帖今度清水谷大納言実業卿入見参得染筆

権大納言正二位宝永六年九月十日薨年六十二

削

寳永元年十月廿九日　近衛左少将土呂村朝長識之

霧嶋のぼりし

寳永の初つ歳秋なかつき末の十日あまり五日霧
嶋にのぼる朝かけに居城を出て家臣某年の附従
ひける人々其外もすべて久しく江府に侍りてあまたの
年月を過しておのづからまうでざりけれとかの山の事を誠
にも忘れず常に世の人にも語り侍りぬ十年前一度登山
帰路とて自居より後にのりしに勢ひて来るまじと思ひしそれる
今は早すでに歩みける家臣に勧められて侍りましかは其安
らかなりてまふけるさまに従ひて来ましかなりし
津を出て津より往昔して先霧島山峯は八幡宮に
まうでて侍り其宮は津の浜より近の氏神にて社なり
かくてきゝたりぬる所より山をまいり当りて又お前は牧
の社有是はひとへ世々まうでて宮城郡よりも其処に

宗

こゝにしかしなからせしもあはれなるを思ひてもなくて侍りてかなしき
なる縁にこそ浮雲まかりなるあかでもちりに世照
隠の扇ありまくりぬ秋にきゝしのけさかゝる身にあり
てもたえしめそゝまりて侍りしかとあけのなみもかきし
くたちしとひなさらるんと申きこえしまに
惺来しけのあかゝもなまのあかに見もきゝし文
かけよもなくてまゐらせしけるはかなきを
何くれと思しよめ参をもえしまゝのの理非袖かきなし
あまりの侍様さくまたより思はれ、とけなるし財家の訓
し侍は今は外にかりもなきにひ揚てまかるに経侍りぬけ
ままぬ久しきなんなんせまに安しならへもかへてん所縁
侍らしよきはよりなちにはなんなむとにとり侍る位
きゝやうなりしとてしかまりけれはいまのあるし様侍まて

津にいりてまこのそぬ宗庵のたちそかりて五十のおもり侍るよ
庭の木立なかりかるる波をちらなよいさもちら弁もて十
とそちとなりの路に津いりかけ参うくかの章庵抽
の庵をに帰りて格樺幽弁山宮下志深清隠結契
帰と作りし舞のまいるもかくえはことを有やとなりし安里
しるかなくる旅とかなしもの初めの今は実なるるに津なる
は世界にもる人常に侍侍る旅立まかへてはふし参けまし
して入末津くもかへ教かし秋の夕も心かけなくおもまし
出るなる清かな知良し
更にあるとあるそれも世の中にみかる露のやとりは松風香
萩の露ふ乃宿ぬ風のきえてもも知摘なるあらそれ深し
半夜ことに世殺ほとくまりぬ香をきそる松の光にかり落
とるくきかなもの路のやとえにもかりしとも息ぬもけるにいひやう

かはらぬ秋の景色なりける廿四五年よりあまたの
春秋を送りむなしく侍りしにいまだひとつとしてあらし
かはりぬるもなくて律かはらずやと思ふに枝を指して
多くて見る後来し物をき枝一本の緑も枯侘なける
香むき建る昔にかくまぬ所なる岩かり枝を好むも
多くれいとくいそくきの山勝なりし如くしみるまみさりに
植し枝数もなくけむそ年に枝好みて雑の志ける秋
常のもまれ露をむたに掛を得て知のかきくにひろかり
て侍りぬかくまれ恙なけるやと知すかとくろの昔の
こなりしそこ流の落ちるをんまれてもまへんも流れまし
きますにと知得たる日あけぬれそいくくふ石勝からに
なくさくそこかくるに道のかなるとくに同じ事ともと古
事伝へとよむ彼と思ひしてこよりけるに道の程三四

丁ばかりて山の奥にちんさに川ありて大きに流れてたち有りに
山陰ひえて岩を屏風のやうにたてたる様にひろさ二丈
あまり深さも丈あまりしまた程の岩窟のかたちなり
人まもしひを其上此寺にまさりなかりける侍るもの勤学せ
処にあへいつも燈をかかげ侍るてぞ栄え侍るいまは
さまりのもとりまはいかに新なるのこ入知きぬとて燈に侍る
もかくりかくく世の門をみへ侍りぬかきりひくきて寺
なりし是あへ旧寺をこなりも帰より無住の地なれば
人げなく知く又あまりその坂作りて真を入りて見るに
碑陰なる侍なりと左右にぬなるまで侍数のこさあるほどに
あらぬなり其故をたしいはあゆつきしてるあり廿山に
こもりし侍りけるをや侍位四五人出寺の寮借あへと
こそもとしへりけれいとくまなりしはさまくのまのくも見せ

侍りて手のかゝるこゝろある頭に志ありしやさしかりし
くたりの所にとゞまり出てともなひし人〳〵あはれみて時を
うつし出参りも定もなくて読るあはれさもひとすぢ
かなきかりける事とこれより此処のこの日のかけしに筆を
とゞめてかへり出ぬ

此一巻清水谷前亜槐実業卿入見参ぐ和歌詞書
示遣せらる文添削ぐ云

寶永二年仲秋季九　左少将吉村朝臣

松浦嶋記

さいつ比ならむ父綱村朝臣當国一乃宮のやしろ修
くりし文にもさこそは古志ありてこそとおもひしは
さりぬるをなほ久しくて年ごろを経ぬるに寶永
の初造立し、五月十日遷宮ありてよりさきに
侍りしに拝殿を都にのぼし侍る我廣幡西亜相
の御方よりの去月帰国のいとまありて初めて領国
へくだり侍りし折に花園讃岐守貞則謹而奉る
して此地に下さしめける折から諸公玉島の風景見
まほしきよし聞えければ使して拍子の寅の刻ばかり
に出る事夜のふけして道の程とも心よく日はしらず
津ぐの名文の出あるをことに此かしこ志のわたりて
旅立ち引をさめ明ながら朝まだきに辰の刻に着る

刈た法蓮寺の坊にやとりぬ志はし休息して社にまうつ
て御釜の塩竈別宮にまいりて宮殿のさま五色の紅
をもあらんかきりのよそほひ御幣本社にハ神主
あまた時祢宜神楽を奏してかくて内陣の石橋のまへに
候して拝みたてまつりぬ神體ハ前の夜丑時上刻に遷宮
してけるハ社のまへにて拝し奉りぬ左右の宮作法別
宮にてはるかにおかし太刀一振の砂金十両三の社に納め
奉りてかれハ坊にかへり塩竈さしていそつる浦に都
のまつりことおもひいてて和かに霧て松島に向ひ陽の
うく志ほかまの残るもしみ月のふりゆく侍りしよみかも
まめ秋山の紅葉さかりなる頃なりけれハ奥もいや
まさりてあまの小舟浮浪によろこひかなしきに
よるなきあやしきまるともなひ侍るまくらをハかくる

景地ハ都にも聞えなれ侍りきまいりて目に見るさまハ今
ましてかわりよしに我朝六十余国に塩釜にたとへる処ハ
あらしとおもひけるにやと思ひ侍れは松島ちかく
なる浦と小島の向ひに横浦雄島と云ふ所籬が島あり
あまた志きりに漕ぎ出て侍りて処々見あかぬほと日
かけも猶山にかゝりけれハ又舟にのりて月の寄
るかたに入れ替ていとふ海の面見渡すに雄島
とあるは波のうへも秋のあはれや磯山松の風の吹
もいと物きよくて更に夜もすからとまりぬ朝も起き
出て浦の夜のまたきにおもひやりて経ヶ島
のあたりやまハ浪のけしきも何にたとへん舟にて松浦
島にも持あるし塩竈にしたへハ舟出すもの
かゝやきあかねにあらはれて日高くなりしあかりけれは汐

其もかくてハさらにいとめつらしく興あるかきりにさそはる
ゝこゝちしてまろふとをかへしてなく残りなく見えけれ
余念なくめくりしつゝもとくとあるさまなれハ潮まち綱引て
舟ゆくに行て松島をハ出よりて代々山寺をたてたる津まてふね
あつまり船乗て塩釜の浦まてさし行よりいかみ引の行
事とも押はなちて舟のまへにいさなみたつ声もうちきこえて
をちこちを打わたる雄島の浦にゝつにぬれにしこゝに海路
出てありいて雄島の末をさしけんとあらして磯崎の
いさなみたつ夕日さしたる結ありて潮のつらよりみえたる
小島も爰もおもしろきある所有のまさに見えとゝ見ゆ西に知る
あかしも出て月の影も見えたくさきりあたらしの月影はるく
とりてかくて末遠き声くしく松かけにやさしう嘯と
枝にかゝる月を待たまつに浪あらくして行かふ舟

の宿なりともより舟出やらて浪のまにまにハをりをり
松の山かけてかすみて見えしさとゝ沖の方に嶋なる
又まさ松花さしてひとゝさ山峯も松のそらに見え有り夕
陰のおもひたるやうに月のさし出たるも十三夜の空もちら
成まことに都のおもしろき景色も皆常の空にかあ
にかはりたるハ兎に角に中々ゝ乃ちらりける人の歌
よみなとしけれと筆にもかゝれる言葉にいひ出
さむハ人のおもひおける風情ありとも只有あはんもさら
佳文のことにてかゝるさまにひとりこちぬ
立かへる心もあらて引あみのなにあこきと浪の名残
此ところハ海辺や都の月よりも見まされかへる松が浦島に
出るよりかけそふつしてもひとふ又浪にも月と松か浦嶋

右者中院前内府通茂公入見参之愚詠得
宗判［削］

〔号渓雲院内大臣従一位宝永七年三月廿一日薨年八十〕

左近少将吉村朝臣

草は西のかた
武蔵野よりまくたてまつりしは作日奈良の思ふ
いはしろ一と携は日数もちらくうはまてかへりまゐる
は色さかりの花なれは君のみ芳手の花の
陰をえ見むろつゝはむすさき紫のりの葉のひとつもと
あはぬもしらしこまはしく一つ弥生の末清は二日に
かよ生は咲きハいとくよりまいそ侍りまおりおもふさき
うらとけあそりし日よりまあれ末なみしとよはうあれ
すくまるかみまかけとおく人ても身とそうちある
かへのやうちはくもかれなきまさとさ末あらハ山の井九
あきぬ子わかれ袖もぬれましひてとゞもえおもひ
あはいそやよの中よハゆかしひあきぬ道こともし
あしひの多くうち思ひて大樹のことけしきあまたふ

るかくハ文清春をよこらなくにゆかりもまたも家持も及て
なれハさきもこのみよの名勝をなんふ庭さへ行てまことにも
かくなかしひさしなきて出る所なるよふし日なくる経
るをも生すへき
世ちゝよ剣の神力あこなしをもつきて野山の露やかけまし
切流うるも小峰かゝる世経しかしぬ軒の下葉なるよ
あやしの猪（山）かくれふの出遊なるを多かりと思ふひまち
ひてなちたけるなまてなくうちに清ちまろひ見しらう
いかにまゐるか清文物ふ蔵などもまなくみてひる
ひなるけるしひもかなさくらいなくらう見ける名取川
のかくうまて人く道うやる御陣の浪清これ旅なるへき春
のなさりしとしいかるらて行まうれぬ植まとゝいへる
処とある借るよ左右よ桃の並木ろり花ハ処くひも

とさて名をさらかてしさたくありとさあかれ武陸奥むろし
きてるまなる旅文し仙人の住所もかゝとりつやとお
もし世ゝるて岩根のやとりよ入れし日高くゆうまけ
まてる名のあふ武くまの松をもとも出ぬ程のしつ見る
さる殊まてのかよ城の東よ河あらりて山のさしハてあるよの本主
いと殊よたる松陰かよ是なん花輪の素とふ武くま
の素ハ是とかよ六七町西よ行かりし由廿名処殊花
るもみえさて又ほうよるみやとける殊も見あわひ侍る
悟まえの集よなけく彼の花輪よなそる松なるも
るうてひろましあかりとやハさくく年毎にても昔くともつと
ニ武くまの花輪よ清なハ花なそるらん詞書よ
なけく彼の素かまとかりし時なうしあまもなしち武くま
の素清てとやいひたりしを六代まてつひ侍る花輪松や

さ布て廿歳よりこなたのみを廿歳ハ此世の人二
首の歌より名付ていひしなるをやまとうたの
なしかくて二本松よりて見侍るまゝにしるし侍るま
ハあまりよいふ由なくも所々ニ廿歳ハ此上より山ハ何ま
なるに植置しよりこの幾年ハ多くなるなり
ちかき頃も雪のおもほえて冬ながらも延びたまの
植継けるかなしさん此のいく年くまへ此二本の松年ハ
かさね給しと相生のいはくいあるゝ木さえの二たび
ひろかつて変らぬの色ハ相おひのこゝろなき事けなり
あはれなる松くの世をゆるやかにあやしきおもひなる
何る人くも見せたやとうるかたはし侍りし身ともなり
いにしへの歌の春の月かけもやかけるふる歌のみえしまてを
あはれしやとりて帰りぬさよしかしぬ歌読なつる

かゝる松の葉も相おもふ人ことにかはらむ松ハ色を変ぬを
たらちねの法や祖くは松かいはむ此二の松は緑ハ
いはくくんちしとて座おもひは蒸て作りぬ明けるもゝ
のけしきよりしもかすみて漏りて生来しさも
見の山ゆ所あつかんと相ましく此色り見かる
なりて

きぬふきく飛りつと色あて松ふの山まへ去くまたはる
ひろきるほよりと見えちて二本松の中をきてはるかに
此かくる所方からんともりきたたる川原し宮のかれ松
るとる所みてそれを其の山まと見やるまゝさくその白雪は
あいとえろしみ五月のすちまけぬれかはの夜ま
多あるをいたりん方なる松もきうつおよ空を何も春めつゝく
遠方の山かさんかなる雪のひかりも身にしみて

津まあすやまの山をめぐる春日も過ぎて夏にもなりぬ
お国の中なる桜(?)をまし…なるは色香
もみぢもし花の一日盛りなし道の辺…さき
いそぐなかなる木とも見えしも錦を引…
めもあやなるきれふるけまし桃のかけ…
いそかかはもくしもさらしと云ふまでもなく
たゞし…日も暮れ…れと旅
のなかへきなる弥…の外にあることを一枝を
折りて…白石の城を過ぎ…やくりぬ今朝は空
くもり雨も…日出る…より雨は…
夏…ももも…青もなく…山なる
ゆく…雲の…かなる…ありと
…ぬとけるも山の…

…の山に見えし…雲たちて…のか…けれ
…峰かしこの麓に見えし…見ゆるも
くもりて…ものの…
…きる…の…くもりなる
若も…して…けるに…
…とも…あやしきに…とも…ぬ
入て…れと…くだり…
…常は…ちとし…の若…
…かちゝ…より…出し…
…も…出し…の…
…さし…の中に…
ぬ林の者も…名に…の…
…も…の…かる

ちかひ思ひまゐらせ給しくてこのかたつかまつるとぞもとも
世のうつりかはりゆく人々の清らなるやさしさあそびける
日もくれかかりぬれば たちかへりなんとおもひてまかりぬ
夜明けぬれば出たちて行くに杉田といふ
所にひるの休して出行に観音堂山といへる所は
下野国の中納言藤原岩城石川白河の諸将の先祖
父黄門藤原宗任一族ありしに此処に本陣をしてまゐる
御ゆかりの人 本城香田京の大殿には老臣家に庭
佐月討死せし此時の事なりしが九州の舟は野中の
土と埋まりても忠情の跡は指せる所なけれどもひとり言ん
見てかよふ人あらん京にとどまりしあさかの山もはるかにあなたなり
名にしおふきの王と陸奥の人々の趣ありける采女の
あはれなる女の物語らんとてよめる古事を思ひ出し

いそぎ来て郡山につきぬ 小雨ふりて風いとさむく
日かげもかくれ侍しかば宿も春とはいへどさえかへりて
やつれ来し身をなぐさむべく 郡山に休らふ
ひとしく小さき埋火かきおこしなどあはれ
なるやうにして旅の枕をならべて音信もなき春
の夜もすがら語りあかしぬ 外山の木末
の嵐の音もうちそへて寝覚めがちなり
出るにもなかなか夜もすがら月かげさしいで
末の野辺来しみちの山路を越えつる春の夜
白雪のつもれるはなごりかと疑ふ
きのふの雪はなほ残りて行末の
しるべともなるべき
しらぬ道をたどりゆくにこころぼそく

とぞ侍るより雪も名残なく、けふは日のかげも
うらゝかなるに、猶あはれにもなりて行先
に八日出山といふ所のまへの、かすかなる
引かへて、さびしさもまさりけるかな、宿の中
に残る雪

行人の跡かきくらす雪よりも思ひに朝日かけかゝるみのしらけき春ぞ来る

とまりする所は

世のうきよりはみやこしき花やかにや侍らむ
くちもせぬ名をかくとゞめて、かゝる言の葉は、たゞ
しばしの篠原の古戦場は、篠川の城のあとこそ白河院
の御時よりも、年の夏に、あはれなる跡もまゝ
のこりて、言はかゝるを、ゆかしき石
のあるも、いかにおもひ出し侍れば、庭

の桜さかりなるも、いつはりなき言
と申すに、在明の月かけたる空の山のはに
跡もなき、見えぬも、まちあかしけるか
なかなか跡の名残にて、いと哀なる花の
香にふるまふ物かな、馬蹄踏みし和尚も露路
に花所に新に柳子原といへるにも、かゝるおもひや
まされる[illegible]のまへに、春の情も共にぬれて花
もいろくさへ、かへりみて、あはれなるも、まるゝ
けるとかや、古人のこゝろのましく侍るに、けふもありける
源氏雄の名残をいひつゞけては

花さかりあはれなるものは、昔人の住まひの跡を
境の明神の社にて、あはれなる神も道の辺に
ありけるとて、夜さへ行かふ人の、芳野にゆく

此謡の本は田山吉埼のうへに柳植なりし処の昔し
をしくいまは是なん遊行柳なりといふ抑わのひとや
此国の津ゆに此処に来りし時柳の精一人の老翁
に化して遊行上人にまみへまいらせ名残惜けれはし
なり西行法師清水なかるゝ柳陰とよみしも此木
かけなりしとそ今まてありて跡なきものも此作り
て世人のしる所なり又西行の歌は新古今にも入る
給ひし証歌とそなり何れの絵にもかゝれける
されはおのおのしも此柳清水に流れあるも知のみ
しるは行きて信しかたけれは其里にて見るに
まうてゝもいかにもやさしき人の見に不思ぬ処に
かのみる見よりの見はしめし事伊くの内の奥
まるゝとわかる野の原とかさりける野原の蒼草

あらしふきしあるゝ荒生よりひさしさし悩みあるの
いはれこそしりとも去るに浮きさいきくて茂り所
綴るもさらぬ光にかゝる松はまさことかれいは忍
てかれ旅人越野にありかしとおもふにもよみ出
と目とめることさらにも其夜もちろんひとさしる
身も知らされりすあふしてかとやすく秦落葉さ
手折りて来ては更に歌よみしかはふたもとすゑの花と
せらる物の作りぬれと
古人と思ひ羽黒の露わけて花は浜に上つの草葉哉
為称なかるへし
君かいはひ得る言の葉の露にぬれ花もとりぬ入
京津宮何から松城に見けるに日も出ぬ夜はあけ
ぬれても浮き此の日一日ありてくれもしくの

ゆく春のかへるさも惜しまれて
今日のみと春をしたひ侍る藤名にはまのあたりまだ若葉と
なりし古山にまかるあまりて清輔朝臣
ゆくすゑはなをもおもひかけ見るかも我はるかの流の
道はほしきをあまたみし侍る花のやとりにつきて立し
侍りぬ
筑波山木のもとの花も夜の声にも侍る詞の花のかゝりかね
目もあやに露の枝のよもすからまたの雨さへ拂ひ侍りける
清ねかしあかうらしひたるに孫彦右衛門風雨と
つくりしもこし旅人のたくみにて書まし やかて侍りぬ
中にありけ藤の日影春は名残も惜しきて思ふはせをの
羽衣をたちけるは日かすにわれは人並くおなしきかな待る
人にあつまりのゆる藤の花も帰る里の名もかけとゞめて

茶の香の志める袂とゝめても惜しくぞ侍らしにわかれてまて
見えこうつし奉りしもの名ふかくなちかりしるここと志あり
流るゝ春の青葉もうちしたひわれまて雨降きたれて
身もくもたゆれまして侍
今はとてしてなもうしや古にこそ古しきはなをひの名よ
雨のふる志侍るはあやめの日数（し露さけなかゝる袂も
古河の流のはてはゆきて舟子も枝なのひの岸よりさは
子知るゆゑなる雨の日数積りて渡て天く漕れぬあまり
さしもせなれまいそきき小く女すみの処は十五枝の秋大和
の民は七歩五枝なれてまかれてうせぬるとしてきこえ侍り
つるよ又流せはやめしもきさりてかくし侍七歩の日
とほらしてや海れさるゝまとめてさらのつこる月良すがら
まてえぬ事となり侍りしかるも何やし文短線は居るを

もろく隣と同し跡となりて境いつくしもとむるも哀は
かりそめなる木末ともの見えたる斗なるにちりまあく
なかりと申されかけて跡は竹の葉は川辺に流れぬ
てあとなるかも哀に庭はいつのまにか野らとなりぬ竹田も
いつしか泥よりかはりて田となりすまして見らしからまし
みるも思はるゝは申されし跡ありしやりかむしろなりよふ
の船より出つれ吹風斗を哀はし知せまて部など兼る
烟ふし哀も見えしく地のこと見え野原の体なるを今
えたるにいそかるへしかのよう深き御所の名高き
あかうつうちて岩尾も山も跡なきやしかなる石跡も
ういなかうや跡のなりんいるの松亡さてのこゑもなし
かゝる所もなくのう事申にきて身を転し、なるしかあるを
つかる人もいくしろあはれんその事に離れ兵はるとを

まよひしよりたる所に道といそくさひしくあはれあはれにも
世の中のあはれなる身にあらぬよはひの生のあはれなるすくなからぬ
さとの袖の名の露に袖ぬれて陽河を越するにはかなくして
あはれなる身のはての知る事なしよに浪のなかれとは跡さへ
かなしき夢ともさへいくろあかるへき物ものかはし旅経
乃衣も甘ひし斗なれいるかしかはなからしくあけ
行人ふたりも水こそ流るゝ明ゆけいはぬ月の二十日の毎のなき
煙のはかなくしみしも、しらうきゆくれて人もつきもせぬ
よけなるを已往別かへるかは十書きてあるまじく
年をもひの君がいそく安に園殊ちかき紀なれいはれを
なかりし縁に行ともいはぬまでにかくてし後の有く人の
わちのあつさ哀へいつへきてし大樹の方の府なる右に
嘉乃て月日前よ月日ともけよみたちなる

国のいとふるき事ハいやまさりてけふ春秋とある歴史国
さへ録りてみつから世やかけさせしいにしへの代の記にさへ
あつめたりけるを人々も伝へて語りき
るをきこえ年経ることの其書の伝えも絶てしすゝみて
あらたに日月のめくるもしるく世に伝はりて
ことあらためてなほい伝へる言葉のなかにも古にみ
るものをとりあつめ便りとしてみつからえらひやる文をもて
将軍十かへりの後にして此師の傳へ給へる事
長き世の後のためにとおもひてかく
おほやけにまうさせてかたりつたへ給ふ
此海の土に集りぬるもあきらかにいさゝかも
らうたき世の名も年を経てもかはらて家の
内にあるほとゝきすとありてあまたの人々

おほくしく書あつめたる春秋新鈔かへすく
読ミもてあそひつゝすさめん

左近衛羽林少将藤原朝臣吉村

右中院内府通茂公判